

2014年10月8日

申請者       ファルザネ・モラディ  
論文題目     身体語彙を含む日本語の慣用句の分析：ペルシア語との対照を通して——  
                 「目」「耳」「口」「身」を用いた表現を中心に

論文審査委員   糟谷 啓介  
                  イ ヨンスク  
                  原 隆一

## 1. 本論文の内容と構成

慣用句は、単語の連鎖を構成する個々の意味要素を結合させただけでは、その全体の意味を理解することはできない。ひとつの慣用句は、それ以上分析できないまとまった意味をもつものとして認識される。したがって、慣用句は言語の意味論的体系に属さず、ひとつひとつの意味を個別に覚えねばならない。その点から見ると、学習者にとって慣用句は記憶負担の大きな要素になっている。一方、このような慣用句の多くは比喩的表現から成っている。認知言語学的发展とともに、言語における意味拡張がメタファーやメトニミーなどの比喩を通じて行われていることが明らかになった。その原理はけっして厳密な体系性をもつものではないが、一定のパターンに従っていることも確かである。本論文の目的は、日本語における身体語彙を含む慣用句の意味を認知言語学の枠組みを用いて分析し、その結果をペルシア語と対照させることを通して、日本語の慣用句における意味拡張のパターンを探ろうとすることにある。

論文の構成は以下の通りである。

### 第1章 問題提起及び研究の意義

- 1.1 問題提起及び本研究の意義と目的
- 1.2 認知言語学についての予備的考察
- 1.3 認知言語学からの主なアプローチ
- 1.4 本論文において対象とする慣用句
- 1.5 本研究の基本的な目的
- 1.6 本論の構成

### 第2章 日本語とペルシア語における意味拡張のプロセス

- 2.1 日本語における意味拡張
- 2.2 ペルシア語における意味拡張のプロセス
- 2.3 日本語の慣用的表現の分類
- 2.4 ペルシア語の慣用的表現
- 2.5 まとめ

### 第3章 日本語とペルシア語の「目」を含んだ慣用句の対照

- 3.1 「目」の意味分析

3.2	「目」を含んだ慣用句の意味分析
3.3	まとめ
第4章	日本語とペルシア語の「手」を含んだ慣用句の対照
4.1	「手」の意味分析
4.2	メタファーによる「手」の意味拡張
4.3	メトニミーによる「手」の意味拡張
4.4	「手」を含んだ慣用句の意味分析
4.5	まとめ
第5章	日本語とペルシア語の「口」を含んだ慣用句の対照
5.1	「口」の意味分析
5.2	「口」を含んだ慣用句の意味分析
5.3	まとめ
第6章	日本語とペルシア語の「身」を含んだ慣用句の対照
6.1	「身」の意味分析
6.2	「身」を含んだ慣用句の意味分析
6.3	まとめ
第7章	結論
7.1	本論文のまとめ
7.2	今後の課題
	参考文献

## 2, 本論文の概要

第1章の前半では、本論文の対象、目的、意義が述べられる。後半では、本論文が採用した方法論である認知言語学の分析枠組みが提示される。日本語では、話し言葉においても書き言葉においても、慣用句が頻繁に用いられるが、慣用句の意味はその構成要素から導き出せないため、記憶負担が大きく、外国人が日本語を学習する際にもっとも難しい題材のひとつとなっている。しかし、認知言語学の発達により、メタファーやメトニミーによる意味拡張のプロセスが説明できるようになった。それによれば、字義通りの意味から慣用句が形成されるまでのプロセスは、すべてが恣意的なものではなく、なんらかの認知的動機付けがあるとされる。そうした手続きにより慣用句の意味を説明することができれば、日本語学習において有効な手段を提供できるはずである。さらに、第1章では、本論文の分析がもとづくデータについての説明がなされている。書き言葉としては朝日新聞の天声人語が、話し言葉としてはテレビドラマと映画のシナリオが使われている。後者は自然会話のデータではないが、それに近いものとして利用可能であることが説明されている。

第2章では、日本語とペルシア語に特徴的な意味拡張のプロセスが認知言語学ないしペルシア語のレトリックの観点から分析されている。前半では、比喻表現のうち単語の意味に関わるものとして、類似性にもとづくメタファー、隣接性にもとづくメトニミー、全体／部分ないし類／種の関係にもとづくシネクドキーの三種類の転義をとりあげ、日本語の意味拡張を分類している。後半では、ペルシア語のレトリックの見方をとりあげ、西洋のレトリックによる分類と比較している。たとえば、メタファーは、ペルシア語では「語」

のレベルで生じるものは *este'are*、「句」のレベルで生じるものは *kenāye* として分類される。その結果、著者は、ペルシア語で “*este'are*” “*kenāye*” (メタファー)、“*majāz-e morsal*” (メトニミー) と呼ばれる表現が日本語の慣用句に対応すると結論づける。

第3章から第6章までは、それぞれ章で「目」「手」「口」「身」を含む日本語とペルシア語の慣用句をとりあげ、その意味拡張のあり方を分析し、両者の比較対照をおこなう。この四つの語は、第2章においてとりあげたデータのなかで、慣用句としてもっとも使用頻度の高かったものである。意味拡張の分析は、まず慣用句で用いられる語の基本義を確定し、そこから派生義が生まれる意味のプロセスを跡づける、という手順をとる。その結果、慣用句においては、メタファーないしメトニミーによって意味の拡張が行われていることが明らかとなる。

「目」「手」「口」を通じて言えることは、日本語はメトニミーによる意味拡張が主であるのに対して、ペルシア語ではメタファーによるものが多いということである。たとえば、日本語の「目を落とす」「目をやる」という慣用句は、「目→視線」という隣接性に基づくメトニミーであると考えられる。それに対して、ペルシア語にも、直訳すれば「目を落とす」「目を回す」という慣用句がある。しかし、これらの意味は、日本語の「目をやる」「目を向ける」という意味に類似している。ペルシア語では視線を「落とし」たり「回し」たりする動作の類似性に基づいて、「目」の意味が拡張されているので、これらはメタファーであると解釈できる。

また、メタファーによる慣用句の場合、一般的にいて、日本語における意味拡張の範囲はペルシア語よりも広い。たとえば、日本語において「手」は、形状の類似性に基づいて、「動物の手 (猫の手)」「植物の葉 (八つ手)」「器物 (熊手)」「自然現象 (火の手)」にまで拡張される。その一方、ペルシア語においては、「動物の手」「器物」への意味拡張は見られるが、「植物の葉」「自然現象」への拡張が見られない。

第6章でとりあげた「身」を用いた慣用句は、他の三つの場合とは異なる特徴を示す。日本語の「身」は具体的な身体を指す以外に、抽象的な対象を指すこともできる(「～に身を捧げる」「他人の身になる」「勉強に身が入る」)。その一方で、ペルシア語では、人間の身体を指す *badan* という語は肉体的な側面のみを指し、抽象的・精神的な側面を含まない。後者を言い表すときには、*jan* という語が用いられる。また、日本語の慣用句における「身」は、「身分・地位」や「立場・境遇」への意味拡張が見られるが、そうした拡張はペルシア語には見られない。多くの場合、日本語の慣用句における「身」は、ペルシア語では「自分自身」あるいは「自分自身に対応する状況」を表す語と対応する。

第7章では、前章までの分析をふまえて、論文全体のまとめが行われる。以上の慣用句における比喩表現の対照から、以下の二つの結論が導かれる。1. 全体的にみて、日本語の慣用句ではメトニミーによる意味拡張が多いのに対して、ペルシア語ではメタファーによるおのが多い。2. いずれの場合でも、日本語の慣用句の意味拡張の範囲はペルシア語のそれよりも広い。それぞれの言語に特有の慣用句の意味拡張の違いは、日本語を第二言語として学習するペルシア語母語話者にとって覚えにくいものとなっており、母語の干渉が起こりうる原因ともなっている。したがって、言語学習においては、ここで示したような対照研究の成果を十分に利用すべきである。

### 3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、テーマの独創性がある。日本語とペルシア語の慣用句に関する対照研究はこれまでほとんどなされたことがない。その背景には、著者自身が日本語を学習した際に出会った困難にあるのかもしれないが、その問題意識を論文にまで高めることができたのは、著者の研究能力の高さを証明している。

第二に、研究方法の手堅さが挙げられる。著者は、日本語の話し言葉と書き言葉のコーパスを定め、それらに見られる慣用句を統計的に分類した上で、そこに見られる意味拡張のあり方を認知言語学の枠組みを援用しながら分析した。その際、メタファー、メトニミー、プロトタイプ、スキーマなどの認知言語学の概念をよく理解し、それを日本語とペルシア語の慣用句の対照研究に応用した。これらのことが本論文における分析の信頼性を高いものにしている。

第三に、分析の徹底性が挙げられる。慣用句は文法事項と異なり、体系的に説明することができないため、どうしても網羅的な手法をとらざるをえない。著者がとりあげた慣用句は膨大な数に及ぶ。それらをひとつひとつ丁寧に分析し、意味拡張の特徴に応じて、いくつかの下位分類に整理していくという地道な作業を進めていった。その結果、日本語とペルシア語の慣用句に見られる意味拡張の特徴を描き出すことに成功した。このことは本論文の独創性として高く評価することができる。

しかし、以下のような問題点も指摘することができる。

結論で著者は、日本語とペルシア語における意味拡張の違いが日本語学習者にとって障害になることを指摘し、「母語の特性が第二言語習得の悪い方向に働く」「負の転移」「干渉」という現象として位置づけている。豊富な資料を用いた分析量の多さに比べて、この結論はやや単純ではないかという印象を受ける。たしかにそうした側面があることは否定できないが、日本語とペルシア語の言語的特性の違いという興味深い観察がなされているだけに、この方向での考察をさらに深めるべきではなかったと思われる。

また、認知言語学はたしかに強力な分析ツールであるかもしれないが、文化的側面からみたペルシア語の興味深い部分を切り落としてしまっているところもある。ペルシア語には、歴史的にイスラーム修辞学(バラーク; balaghat)という豊かな学問体系が存在する。本論文では、第2章でそのことが触れられているが、ペルシア語における比喩の分類そのものが日本ではほとんど知られていないので、さらに突っ込んで論じてよかったのではないか。

以上の問題点については、著者自身も「今後の課題」のなかで、「認知言語学という観点だけでなく、両言語において派生した意味の違いを歴史、社会、文化の諸要因の影響という脈絡で究明していく必要がある」と述べているので、これからの研究のさらなる深化・拡大に期待したい。

### 4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士(学術)の学位を授与することが適当であると考えられる。

## 最終試験結果の要旨

2014年10月8日

論文審査委員

糟谷 啓介

イ ヨンスク

原 隆一

2014年8月4日、学位請求論文提出者 ファルザネ・モラディ 氏の論文「身体語彙を含む日本語の慣用句の分析：ペルシア語との対照を通して——「目」「手」「口」「身」を用いた表現を中心に」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、ファルザネ・モラディ 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、ファルザネ・モラディ 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。